



十和田市立中央病院

病院ニュース

さわらび

令和3年新春号



新年の挨拶



ビヨンドコロナの社会を見据えて

十和田市立中央病院
病院事業管理者

たんのひろあき
丹野 弘晃

明けましておめでとうございます。去年は、どこかの誰かの問題が瞬時にしてみんなの問題になるということを思い知らされた、まさにコロナ禍に翻弄された一年でした。本年はその大災害を乗り越え、安全で安心な暮らしを取り戻すことができると確信しています。

さて、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが、様々な事柄について深く考えるきっかけを与えてくれたように思います。「不要不急」という言葉が飛び交いましたが、広辞苑によると「どうしても必要というわけでもなく、急いである必要もないこと」と解されています。主に外出制限の要請のために使われましたが、不要不急の外出は意外に多いもんだな・不要不急の仕事もあるのか・不要不急の救急車要請も少しはあるようだな・そもそも俺自身は不要不急な存在ではないのか等、余計なことまで考えさせられた気がします。

そんな中、仕事については杞憂に過ぎないと感じさせてくれた言葉が、「エッセンシャルワーカー」でした。去年の流行語にも選ばれていたようですが、人々が日常生活を送るために欠かせない仕事を担っている人のことであり、コロナ禍という緊急事態下でも黙々と自身の仕事をこなしている方々に対し、感謝や尊敬の念を込めた呼称として使われているようです。具体的には、医療・介護・福祉、小売・販売、公共交通機関・ごみ収集作業などに従事されている人々であり、その代表格が地域医療を支え守っている「さわらび読者」の皆さんであると思います。そして、エッセンシャルワーカーがいなければ地域社会は回らないという事実、ほとんどの人が改めて気付いたのではないかと想像しています。この気付きを社会全体で共有し、お互いがケアし合わなければ生きていけないという共通認識を、地域の文化として根付かせて行きたいものです。

ビヨンドコロナの社会は、エッセンシャルワーカーが支えてくれているという安心感が地域にあり、医療・介護・福祉等に携わる職能人がそれを感じながら誇りを持って働くことができ、どのような状況になっても誹謗中傷などは起こりえない社会であって欲しいと思います。コロナ禍の経験を活かしながら、当院は上十三圏域の地域づくりに医療の提供という形で、積極的に関わって行きたいと思っています。新年早々大風呂敷を広げてしまったかもしれませんが、本年もどうぞよろしくお願い致します。

